

利用者の生きるに寄り添って

神奈川県座間市
有限会社ふれんどりい
代表取締役 筒井 すみ子

1 はじめに

㈲ふれんどりいでは座間市内で小規模のデイサービス3か所、小規模多機能事業所を2か所運営している。基本理念に、「利用者に寄り添う」「生きる力を奪わない」ことに力を入れ、利用者一人一人の生きるに寄り添うことに力を入れている。利用者一人一人が「自分から生きる」を楽しむために、利用者が主役になれるような関わり方をしてきた。

2 事例や取り組みの紹介

ふれんどりいの介護は介護するとか介護されるとかとの関係ではなく一緒に時間を過ごす仲間として日々過ごしている。5つの事業所にはそれぞれに特徴があり、利用者は自分のやりたいことを選ぶことかできる。

【おけいこサロン寿】

茶道・書道・フラワーアレンジメント・音楽・絵手紙の先生が来て、午前中におけいこする時間を設けている。地域の人が先生としてきてくれるので適度な緊張感がある。

【デイサービスふれんどりい】

働くことを意識したデイサービスでタイムカードを活用し、倉庫管理・食材の仕分け・掃除・草取り・おやつ作りなど利用者が仕事したい人が集まってきている。男性の利用が8割を占めている。

【ふれんどりいつどい処】

料理・手芸を楽しむデイで女性が多い。他の事業所からおやつや注文の注文をうけたり、ぞうきんの注文をうけたりと、ただ作るだけではなく人のために作ることを楽しんでいる。

【小規模多機能ふれんどりいの家】

若年性や認知の軽度の高齢者を集めた。ボランティア活動や買い物を中心に、社会とのつながりを考えながら活動している。特に若年性の方は高齢者の認知症の方とは違うので、活動の提供には特に気を使い本人の居場所となるように心がけている。

【小規模多機能ふれんどりいの郷】

認知症が中度以上、医療度が高い、車いすが必要などの人たちが集まっている。看取りも対応する。利用者には食材の仕入れとして買い物が毎日の日課になっている。散歩などにも積極的に出かけている。

ふれんどりいは定員が少ない小規模にこだわっているのは、一人ひとりのその人らしさに向きあえるからである。それぞれの事業所で特徴を出すことで利用者が選択することができ同じ目的を持って

人を集めることで活動がよりスムーズで楽しみにも繋がっていく。「生きる」ことは楽しくなければならぬ。その環境を作っていくのがスタッフの役割である。常に利用者が主体になるようにし、利用者が自分で動いていると思えるようにスタッフがさりげなくサポートすることが大切である。そのためには、「一緒に過ごす」ことが大切である。

ふれんどりいでは各事業所それぞれの役割の他にふれんどりいグループ全体で非日常的の活動取り入れている。

- | | | |
|-----|--------|--|
| 4月 | 日帰り旅行 | 大型バスで甲府にいちご狩りと桃源郷を見てほうとうを食べるツアーを毎年行っている。 |
| 6月 | 展覧会 | 座間市のハーモニーホールのギャラリーを借り本格的な展覧会にする。利用者の作品を中心に家族やスタッフの作品も展示している。 |
| 9月 | 秋祭り | 地域の人たちにもお店を出してもらい、利用者と地域の人たちが一緒に楽しむお祭りにすることが目的で行う。パン屋さん・コーヒー屋さん・地域作業所の人たち・手作りグループの人たちと賑やかな時間を過ごす。 |
| 10月 | 一泊旅行 | 一泊して温泉に入り宴会をするのが目的。毎年、寝たきりの人も一緒に温泉にはいってくる。 |
| 12月 | クリスマス会 | ハーモニーホールの小ホールを借り各事業所ごとに舞台上がり発表をする。楽器演奏あり、歌あり踊りありで利用者一人一人が舞台の上で生き生きとした顔をしていた。1ヶ月以上もかけて練習をした事業所もあり、衣お装をそろえたりして利用者もスタッフも楽しんでいて。スタッフもソーラン節を踊った。なんと勤務外での練習10回、参加スタッフも20名。スタッフの盛り上がりにも感謝である。 |
| | もちつき | 利用者とスタッフが一緒に餅をつき鏡餅を作った。餅のつきかたや鏡餅の作り方を利用者から教えてもらうスタッフもいる。 |
| 1月 | 初詣 | 地元の神社で利用者とスタッフでお祓いをしてもらう。神社でお祓いをしてもらうのは緊張感がある。重度の認知症の人も30分のお祓いには参加できる。 |

3 考察

利用者主体の考え方で活動や行事を利用者とスタッフが「一緒に過ごす」を実践していくと、利用者との関わり方が見えてきた。スタッフが寄り添うだけでは利用者の生きる力を引き出せず、何でもしてあげればいいと思うスタッフが多かった。「生きる力を引き出す」「利用者主体」のことを考えて事業所の活動や行事を「一緒に過ごす」中で利用者が受け身の介護を受けるのではなく、スタッフが「利用者と一緒に過ごす」ことに変えていくと利用者が自ら動き出し生き生きしてくる。利用者は一緒に過ごすことで不安がなくなるのだろう。また、スタッフが利用者と一緒に過ごしていると知らないうちに役割を果たしているということも多々ある。人には役割が必要であり、役割を果たしている利用者は自然に笑顔になる。それだけでなく、それに関わっているスタッフまでもが笑顔になる。行事の展覧会では、デイサービスの人たちは日頃やっている作品作りがより一層やる気になり、ギャラリーでやることにより、家族や地域の人たちにも認知症になっても、介護度がついても力があるんだということを知ってもらえたと思う。クリスマス会もハーモニーホールの小ホールを借り、観客を集めるのは大変でしたが、利用者が自ら舞台上ることにより、自信にもつながり、自分自身のためになり生きる力を十分引き出したと思う。今まではボランティアさんに出し物を出してもらって観客になっていたが、自らが舞台上立つ方がはるかに笑顔が多かった。旅行も楽しみの一つで、旅行に行くからと歩く練習をしたり、スタッフと旅行先の話をしたりと、旅行に向けて楽しそうに話をしている場面

があり、これが生きる力になっていくんだと思えた。旅行当日の皆さんの盛り上がりは大変なもので、旅行気分を味わってもらうために大型バスにしたことがほんとによかったと思えるほどのみなさんが笑顔だった。宴会も普通の宴会ができ、ホテルの人から「認知症の人でも普通の人ですね」と言われ、ホテルの人に理解してもらってよかったと思えた。

高齢者は身体機能が低下していき、自分だけの力では生きにくくなる。しかし、そばでもなにげなくサポートすることにより、自らの能力を発揮できる。スタッフのなにげない関わり方で利用者の生きる力を引き出すことができることを実践できたと思う。

利用者の「生きる力を引き出す」というテーマでスタッフと利用者に関わってきた。スタッフが利用者の生きるに寄り添うことからスタッフの気持ちの変化も感じられた。「利用者の笑顔が自分の力になる」「利用者といると楽しい」「利用者の笑顔がもっと見たい」など利用者に感謝していることが聞かれるようになった。スタッフも利用者とともに楽しんでいることが利用者にとってもいいことだと思う。認知症だからわからないと思わず、常に健常者と同じと考えてサポートすることが大切である。

4 おわりに

ふれんどりを立ち上げて10年になる。その間、認知症の人たちとたくさんかかわってきた。特に在宅で難しいと言われたケースにたくさん寄り添い家族と一緒に利用者を支えてきた。高齢者が住み慣れた地域で最期まで過ごせる様にサポートしてきたつもりである。高齢者を支えながら、利用者と一緒に地域に出向き、買い物や散歩をしながら少しでも地域とつながって行くことを考えている。それが認知症の理解にもつながり認知症の人たちがサポートしてもらえたら地域で生きていけるようになると思う。これからも、高齢者や家族の大変なところに寄り添い、高齢者が地域で最期まで生きていける支援をしていきたい。